

<海外教室紹介>ハンブルグ大学歯, 顎, 口腔外科教室 の紹介(Universität Institut der Zahn-, Mund-, und Kieferheilkunde, Hamburg)

著者名(日)	堀越 達郎
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	2
号	2
ページ	87-89
発行年	1983-12-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007075/

海外教室紹介

ハンブルグ大学歯, 顎, 口腔外科教室の紹介

(Universitätsinstitut der Zahn-, Mund-, und Kieferheilkunde, Hamburg)

教授 堀 越 達 郎

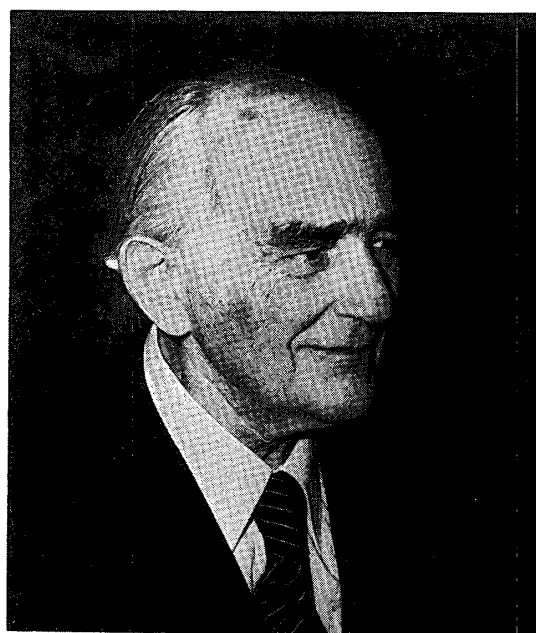
東日本学園大学歯学部口腔外科学第二講座

先般来学されたパイファー教授は、私に二冊の著書を記念に下さった。その一冊には、彼の恩師カール・シューハルト (Karl Schuchard) 名誉教授の80歳時 (1981年) の祝辞がのっていた。その内容を抄録して、ハンブルグの教室の成り立ちと、二代の教授の想出を紹介する。

ハンブルグ大学歯, 顎, 口腔外科教室を復興し、今日のように世界的に有名にしたのは、何といってもシューハルト教授の外科医としての力量, 優れた識見, 及びその人柄によるものである。

1960年頃には、日本で口蓋裂重症例に咽頭粘膜弁形成術の出来る人は、二、三人よりなかった。私は、令名高いシューハルト先生にそれを習いたくて先生の教室を訪ね、約二ヶ月余懇ろな手ほどきを受け、帰路にヨーロッパの各大学を視察して来たわけである。パイファー氏は、当時は教室の講師兼医長 (Dozent, Oberarzt) であり、自宅が私の下宿に近いので、屢々一緒に話しながら帰ったことがある。

シューハルト教授一門の方々とは、その後国際学会で何回かお会いして、私も帰途にはハンブルグに寄って見学して来るのが楽しみであった。特にシューハルト教授は日本語は出来ないが、大変な親日家で御自宅には日本式庭園を作って、墨絵や彫刻も楽しんでおられた。したがって教授は、アジア地区は勿論のこと、アメリカやオーストラリアに講演に来られた時は、必ずといって良い程に東京に寄られて、日本のお



Senator der Deutschen Akademie der Naturforscher: Emeritus Professor der Universität Hamburg: Dr. Med., Dr. Med. Dent. Karl Schuchard

弟子さん達と会われるのを楽しみにしておられた。その様な時は、医科歯科大学の上野教授、故村瀬正雄教授、日歯大の園山教授、東歯の高橋教授、私などを中心に若い助教授級の方も沢山集り、いつも村瀬先生と現在大分大学におられる清水正嗣教授が世話役で、行き届いた歓待振に御夫妻で目を細めて楽しく一夜を歓談して行かれた。

カールシューハルト教授は、1901年ホルスタイン州イツェヘーエ (Itzehoe/Holstein) にお生れになったので、私などよりは、13歳位年長で、幼時北海海岸で育ったものと思われる。先生は長じてフライブルグ大学及びミュンヘン

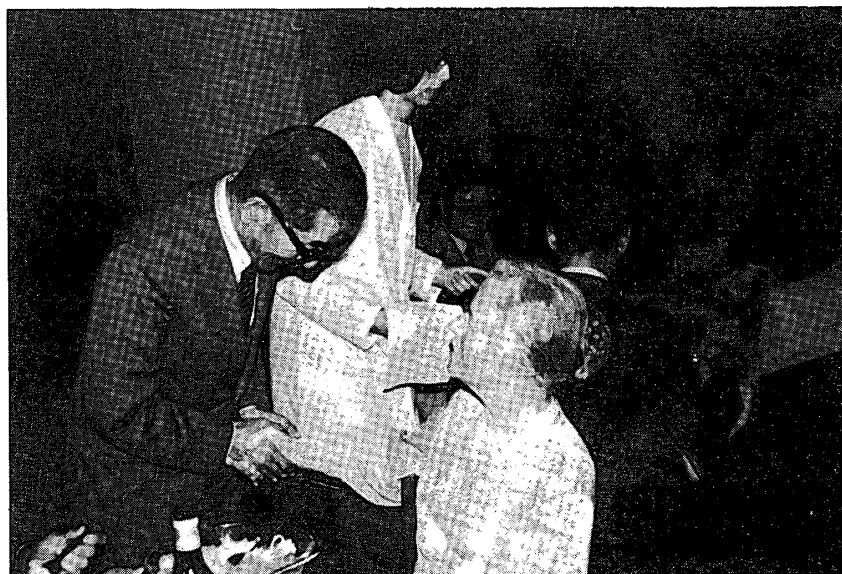
大学に学び、医学及び歯学を習得され、1930年に学士試験にパスして、医学士と歯学士の学位を獲得された。成人されてから終戦迄先生はずっとベルリンで過され、ベルリン大学ではアクスハウゼン (Axhausen) 教授に、また有名な Rudolf-Virchow 記念病院ではワスマンド (Wassmund) 教授の指導を受けられた。先生の天分も否めないが、このお二人の恩師に指導を受けた事は、先生のその後の人生に大きな影響があったと思う。このお二人の恩師は、近代ドイツ口腔外科学の興隆の基礎を開いた方であり、当時は世界の最高権威でもあった。私なども研究生時代には、このお二人の本が欲しくて、神田の古本屋街を何回も何回も歩き廻ったものである。シューハルト先生は、さらに1934年には顎口腔外科専門医のライセンスも獲得された。第二次大戦中は、シューハルト先生は徹頭徹尾ベルリンの中央陸軍病院の顎顔面外科医長を勤められ、1944年にベルリン大学に戻られた。

パイファー教授は、当時若かったので召集を受け、第一線で大変な苦勞をされたらしいが、シューハルト先生が中央陸軍病院で膨大な数の戦傷兵の処置に当られたことは、これも先生の後年の発展の力強い基礎となったと思う。御承知の通りナチスドイツは、欧州各国の殆んど全

部を敵に廻し、祖国を戦場にしまで戦ったのであるから、戦傷兵の数も日本とは比較にならない膨大な数であったと思う。私がハンブルグを訪れたのは1960年であるが、地下鉄やバスの中で出会う市民の中には、まだまだ片眼、片手、片足、顔中ケロイドといった悲惨な戦傷者が非常に多く、祖国を戦場にせず済んだ日本を顧みて、しみじみ同情に耐えないものがあった。

先生は、終戦後一時エイルバック市総合病院に顎顔面外科を作って活躍されたが、この頃大学教授の資格も取られた。1950年ハンブルグ大学の教授に迎えられ、顎口腔外科を担当された。先生の経歴と実績が買われたのであろうが、医学部の一隅現在のエッペンドルフの地に、150床の専門病棟が新築されて、ハンブルグ大学口腔外科は顎外科専門の国立病院 (Nordwestdeutschen Kieferklinik,) を兼ねた大学病院 (Universitätskrankenhaus) の一科となり、一般市民の診療と戦傷兵のアフターケアを兼ねて、またまた先生の獅子奮迅の活躍となった。

シューハルト教授は25年間ハンブルグ大学の教授を勤められ、この間医学部長 (Dekan der Medizinischen Fakultät) も勤められた。私が同大学に行った頃には、医長 (Oberarzt) の座に、パイファー氏とスピーゼル (Spiesel) 氏がおら



Dr. Med. Eva Schuchard (シューハルト夫人, 第2回国際顎顔面外科学会にて)

れたが、スピーゼル氏は間もなくバーゼル大学の教授に転出され、数年してシューハルト教授が定年退官された後は、パイファー氏が後任教授に昇任された。シューハルト教授は、12種の著書と120の論文を公刊されたというが、中でも大作は *Fortschritte der Kiefer-Gesichts-Chirurgie* で、既に26巻に達している。

教授夫人は、英国人であるが、敵国人と結婚し戦時中もベルリンに残り御主人に貞節を尽された方で、家庭的な温味のある人である。教授のエネルギーの根源は、夫人のやさしい愛情と気くばりにあると思う。また26巻の大著作のかげには、パイファー教授を初めとしてドイツ国内外で12名が教授をしているといわれる。先生のお弟子さん方の見事なチームワークがある。

シューハルト教授にお世話になった方は、日本にも10名以上いると思う。これらの先生方が集ると、いつも教授は「東京シューハルトクラブ」

と喜んでおられた。ヨーロッパ各国にも多数のお弟子さんが居られるが、この辺の事も教授夫妻のお人柄の所産である。シューハルト教授は、今尚健在でおられるが、ドイツ連邦自然科学院 (*Deutschen Akademie der Naturforscher*) の評議員として、その氏名と肖像が記念ホール (*Leopoldina in Halle*) に飾られているという。

パイファー教授はお別れの挨拶の中で「永遠

の友情」といわれたが、私の後輩は千葉大学の佐藤教授も村瀬助教授も指導をお願いしたので、今後とも一層交流を深め、両大学の友誼を確保したいと思っている。さらに私がシューハルト教授およびその教室を尊敬している理由は、先生と仕事の話をしていると、歯の組織や発生学、歯周病学や補綴学に関する言葉がしばしば出て来ることである。すなわち先生は医師出身であるが、同時に歯科医学を非常によく理解しておられて、日常の研究や手術の推進の上でも、そのようなアイデアとか技術を実によく生かしておられることである。先生は、御仕事の上でも御人柄の上でも、見事なオーガナイザーであり指導者であると心服している。

パイファー教授は、チェッコ国境に近い田舎の出身で、口数の少いかざらない人で、東洋的な感じのする人である。書き忘れたが、先生の奥様は医学士 (*Dr. Med*) である。「貴方は長途の単身旅行であり、しかも日本人が魚を喰べられないことは、大変つらいだろう」などといわれて、御夫妻でハンブルグ市内のインドネシア料理店や、バルト海岸のシーフード・レストランに招き御馳走して下さった事がある。奥様は女医さんを経験された上に、やさしい家庭の主婦であり、先生にとって最高最適の秘書官であったと思うのである。